学苑・人間社会学部紀要　No. 952　59～66（2020・2）

〔研究ノート〕

「『みんなのたからもの』ししゅう高田松原プロジェクト」世田谷展の取組み
―「生活文化」共有の視点から―

粕谷　美砂子

"Everybody's Treasure: The Takata-Matsubara Embroidery Project" and Its Meaning
―From the Perspective of Sharing "Livelihood Culture"―

Misako KASUYA

At the Setagaya Art Museum in Setagaya-ku, Tokyo, from March 5 to March 10, 2019, eight years after the Great East Japan Earthquake, the exhibition "Remember the 3/11 Great East Japan Earthquake: Thinking from Setagaya" was held. It featured embroidery by Hiroko Amano & thirty-one tapestries on which in total 741 embroideries by residents of disaster area and the other participants were arranged. Each piece was stitched with pine trees according to the common theme 'our lost memorial pinewood.' They were inspired by Amano who prompted this project.

Firstly, this report describes the background of the launch of the project. Secondly, the author summarizes the feelings reflected in the pine tree tapestries of the disaster area, Takata-Matsubara in Rikuzentakata City, Iwate Prefecture. Thirdly, the author clarifies the role of students' involvement in this project. The author goes on to examine the significance of embroidery as handwork from the viewpoint of sharing "livelihood culture." The author concludes that this exhibition is related to social issues and is an example of shared "livelihood culture."

Key words: livelihood culture (生活文化), Great East Japan Earthquake (東日本大震災), embroidery (刺繍), pinewood (松林), Takata-Matsubara (高田松原)

はじめに

東日本大震災から8年を迎える2019年3月5日から10日までの6日間，東京都世田谷区にある世田谷美術館（世田谷区砧公園内1-2）の区民ギャラリーAにて，「東日本大震災を忘れない―3. 11から8年，世田谷から考える―天野寛子フリー刺繍画展＆『みんなのたからもの』ししゅう高田松原タペストリー展」（以下「世田谷展」）を開催した。世田谷展を企画するにあたって，2017年12月に，「昭和女子大学粕谷ゼミ」「バージの会」[1]「NPO法人夢のはな奏であい」[2]「天野読書会」など，世田谷で学び，活動する者を中心に，「『みんなのたからもの』ししゅう高田松原プロジェクト世田谷展実行委員会」を立ち上げ，筆者はこの世田谷展の実行委員代表として関わった。

「生活を継続することはそれ自体，知恵があり，文化が内包されている」と定兼（1999：4）は述べている。ウィリアムズ（2013：10）は，「文化はつねに伝統的であるのと同時に創造的であり，もっとも日常的な共有された意味であるのと同時に最良の個人的な意味でもある」と言い，さらに文化の意味を，「ひとつの意味はくらしのありようの総体―共有された意味群―であり，もうひとつは芸術や学問―発見と創造的努力の特殊なプロセス―である」と述べ，両者を結び合わせる重要性を指摘している。一方，生活文化の定義は，学問領域によって様々な解釈・定義がみられ（定兼　1999：2-12，小泉　2014：i-vi），

「生活文化というものは非常に範囲が広く，人間のもつすべての文化の基礎」（小泉　2014: ⅲ）とも捉えられる。斎藤・伊藤（1996: 305）は，生活文化の既存の定義を踏まえたうえで，生活文化とは「伝統性と創造性を内包した生活様式の全過程」と定義している。本稿では，「『みんなのたからもの』ししゅう高田松原プロジェクト」立ち上げの経緯，741枚の「松」の刺繍の作品に込められた想い，本プロジェクト実施が学生の学びの場として果たした役割をまとめ，「生活文化」共有の視点からみた手仕事「刺繍」の持つ意義について検討する。

1　プロジェクト立ち上げの経緯

もともと，「『みんなのたからもの』ししゅう高田松原プロジェクト」は，東日本大震災以来，フリー刺繍という手法で，震災関連の報道写真をもとに「東日本大震災」作品を制作してきた天野寛子氏（昭和女子大学名誉教授，フリー刺繍画家）と，当時陸前高田市で被災者支援をしていた中西朝子氏という2人のキーパーソンのアイディアが結実したものである。天野がこの活動を始めたのは，2011年9月に共同研究者であった伊藤セツ氏（昭和女子大学名誉教授）が（公社）シャンティ国際ボランティア会の移動図書館のボランティア参加に誘ったことがきっかけになっている。その際に出会った，手芸の本を見ていたある女性が「90歳を超えた義母が，手仕事（針仕事）がしたいと言うが，津波で全て流され，仮設住宅ではボロキレというものが無くて」と言ったことが発端となっている。天野はこの言葉にすぐに反応し，刺繍に興味を持ったこの女性に小布を送ったところ，返礼の手紙に「『陸前高田はこんなに綺麗な町だったんだよ』と孫に教えられるようにいつか刺繍をしてみたい」とあり，この一言が気になっていたという経緯がある。故郷を思い出す時我々は，風景そのものだけでなく，その風景に立っている人，その風景の中で遊んだ情景を同時に思い出す。「故郷の喪失」は，そこに生活する人を含む風景をそっくり失うことに等しい。この女性の言葉は，喪失した風景を後生に伝える一手段として，刺繍が彼女を惹きつけたことを表している。

その後，筆者と天野は，共同研究の一環として，2012年6月に元普及職員の藤原りつ氏に案内をしていただきながら，岩手県陸前高田市等を訪問し，竹駒町の「小さなやさいやさん」，広田町の「工房めぐ海」，上閉伊郡大槌町の仮説食堂「よってったんせぇ」の関係者に聞き取り調査を行った（その報告の一部は粕谷（2016: 99-102）に掲載。写真1，2，3）。その際に立ち寄った陸前高田オートキャンプ場モビリアの仮設住宅で，被災者の生活支援を行っていた中西と出会い，気になっていた上述の被災女性の言葉を伝えた。中西は，「仮設住宅で引きこもりがちな生活になる被災者が，手仕事をしながら『お茶っこ』[3] をすることによって気持ちが開かれていくチャンスにならないか，また，支援を受けるだけの生活ではなく，手芸技術を活かして生業に役立てられないか」と考えていたそうである。

写真1　被災地の様子（大船渡市立越喜来小学校）
（2012年6月筆者撮影）

写真2　被災地の様子（上閉伊郡大槌町）
（2012年6月筆者撮影）

写真 3 「小さなやさいやさん」(陸前高田市竹駒町)
(2012 年 6 月筆者撮影)

写真 4 「ししゅう高田松原プロジェクト」に
作品を提出したゼミ学生(筆者撮影)

写真 5 「ししゅう高田松原プロジェクト」
作品を制作するゼミ学生(筆者撮影)

2 741 枚の「松」の作品に込められた想い

被災現地を訪問し，被災者に会い，被災者の方々の〈思い出の風景として蘇る 7 万本の松が広がる白砂青松の景観，たった 1 本の松を残して根こそぎ攫われてしまった高田松原〉への想いを聴き，2013 年 8 月に，天野と中西は「ししゅうで松原を作ろう」と呼びかけを開始した。天野が出版した 2 冊目の画集(天野 2013)の最後のページに「ししゅう高田松原プロジェクト」の呼びかけが掲載された。20 cm×20 cm の大きさの布に，被災者の方々の最も思い出深い風景として蘇る，7 万本の松が広がる景観，高田松原にちなんで，「松」をテーマにし，針と糸を使って自由に作品を制作することとした。最初の作品が届いたのは 2 か月後であった。その後口コミや，天野の作品の個展会場で，応募作品を披露しながら，あるいは，岩手県内の仮設住宅や集会所でワークショップを開き，岩手県外では，友人から友人へと口コミ主体で呼びかけながら，プロジェクト参加を募っていった。2015 年末の作品応募締切時には，小学校 1 年生から 86 歳の高齢者，男性，海外の留学生参加者も含め，計 741 枚の作品が集結した。その作品一枚一枚に，制作者の「祈りとストーリー」が込められている。例えば，高田松原の中の公園で滑り台で遊ぶ親子のモチーフは，一見楽しそうにも見えるが，そこには，母親となったが津波で流された娘への鎮魂の意が込められている。筆者のゼミでも，2015 年度 3 年ゼミ生 10 名と筆者が，各自慣れない手つきで思い思いの作品を制作した(写真 4, 5)。こうして集まった作品は，幅 1 m×長さ 2 m の青い布に 24 枚ずつ丁寧に縫い付けられ，被災者と支援者の共同作業によって裏打ち作業が施され，全 31 枚のタペストリーに仕上げられた。

天野作品と，このタペストリーは，陸前高田市，盛岡市，高知市，池田市，丸の内 OAZO，神戸市，横浜市，仙台市，京都市，長岡市，常滑市，新宿マインズタワーなど 12 か所で展示された。各地域で，有志により組織された展示の実行委員会，あるいは個人の協力により展示を重ね，被災者と支援者を繋いできた。各展示会会場は必ずしも大きいギャラリーとは限らず，全タペストリーを展示することが叶わないことが多かった。そうした中で，中西と筆者は，いつか世田谷区内で，中でも世田谷美術館で展覧会を開催したいと願っていた。そして，幸いにも，筆者が関わっている本学リエゾンセンターでの美術

館カフェ・プロデュースプロジェクトでお世話になっていた（公財）せたがや文化財団世田谷美術館がご協力と共催をお申し出くださり，さらに世田谷区，陸前高田市，それぞれの教育委員会，（福）世田谷区社会福祉協議会，（福）世田谷ボランティア協会，昭和女子大学，本学光葉同窓会に後援を，また多くの個人の方々の多大なるご尽力を賜わり，世田谷展開催を実現するに至った。

世田谷展では，震災に関わる報道写真・記事・短歌をフリー刺繍画にした天野寛子の作品 43 点（「東日本大震災」の連作 9 点を含む）と，741 枚の「松」の作品を繋いだタペストリーが一堂に展示された（写真 6，7，8，9）。2019 年 3 月 9 日には世田谷美術館講堂を借りて，トークサロン「東日本大震災を忘れない～過去・現在・未来～」と題して各報告を行い（登壇者及びタイトル：天野寛子氏「“フリー刺繍”と“ししゅう高田松原”プロジェクトの経験をどう活かせるのか」，NPO 法人夢のはな奏であい理事長池田公生氏「被災地の 8 年間をふりかえる」，昭和女子大学粕谷ゼミ学生 3 名（田中咲綾，磯部眞里，木幡千夏子）「若い世代の私たちが今，考えること」，写真 10，11），その後「愛のほほえみ　チャリティコンサート～in Setagaya～」（NPO

写真 6　世田谷美術館でのタペストリー展示

写真 7　世田谷美術館での天野寛子作品

写真 8　世田谷美術館での天野寛子作品

写真 9　ゼミ学生による受付

写真 10　トークサロンの様子

写真 11　トークサロンでのゼミ学生報告

（写真 6～11 は渋谷純一氏撮影）

写真 12　チャリティコンサート（渋谷純一氏撮影）

写真 13　世田谷展実行委員メンバー（渋谷純一氏撮影）

法人夢のはな奏であい）を行った。コンサートでは，2011 年以降毎年寄せられてきた被災地からのメッセージが歌にして披露された（写真 12）。展覧会観覧者数は，6 日間で計 898 名，3 月 9 日のトークサロンには 167 名，コンサートは 120 名，総計 1,185 名の参加を得て，盛況のうちに終えることができた（写真 13）。展覧会の様子は，朝日新聞（2019 年 3 月 6 日朝刊）等にも掲載されたり，エフエム世田谷で取材が放送されたりとメディアで取り上げられたこともあり，それを見聞きした来場者も見られた。

3　本プロジェクト実施が学生の学びの場として果たした役割

世田谷展プロジェクトの活動日程を表 1 に示す。

2017 年 12 月に，筆者も参加している天野読書会で，世田谷展の企画について最初に話が出たのだった。

表 1　世田谷展プロジェクトの活動日程

2017 年 12 月 10 日（火）	準備会
2018 年　1 月 18 日（木）	第 1 回　世田谷展実行委員会
2018 年　2 月 24 日（土）	第 2 回　世田谷展実行委員会
2018 年　6 月 24 日（日）	夢のはな奏であいチャリティーコンサート （仮チラシ配布）（於：世田谷区立成城ホール）
2018 年　7 月　8 日（日）	第 3 回　世田谷展実行委員会
2018 年　7 月 18 日（水）	天野寛子によるゼミでの特別講義（於：昭和女子大学）
2018 年　7 月 29 日（日）	第 4 回　世田谷展実行委員会
2018 年 10 月 27 日（土）	陸前高田展 2018 in 銀座三〜今日まで，そして未来へ〜（戸羽太陸前高田市長に挨拶）
2018 年 10 月 28 日（日）	第 5 回　世田谷展実行委員会
2018 年 11 月 17 日（土）	天野寛子宅にてインタビュー
2018 年 12 月　1 日（土）	第 6 回　世田谷展実行委員会
2019 年　1 月　3 日（木）〜6 日（日）	陸前高田市・大船渡市訪問
2019 年　1 月 19 日（土）	第 7 回　世田谷展実行委員会
2019 年　2 月　1 日（土）	第 8 回　世田谷展実行委員会
2019 年　2 月 15 日（火）	クラウドファンディング開始
2019 年　2 月 17 日（日）	バージセミナー 2019 「バージの会」主催「豊かに生きる〜手仕事を通して〜」 天野寛子講演会（於：世田谷区船橋まちづくりセンター）
2019 年　2 月 28 日（木）	「星に語りて〜starry sky〜」（監督・松本動）試写会鑑賞（於：虎ノ門・ニッショーホール）
2019 年　3 月　3 日（日）	第 9 回　世田谷展実行委員会
2019 年　3 月　5 日（火）〜10 日（日） 2019 年　3 月　9 日（土）	東日本大震災を忘れない―3.11 から 8 年，世田谷から考える― 天野寛子フリー刺繍画展＆『みんなのたからもの』ししゅう高田松原タペストリー展 トークサロン・チャリティーコンサート（於：世田谷美術館）
2019 年　3 月 20 日（水）	クラウドファンディング終了
2019 年　3 月 30 日（土）	第 10 回　世田谷展実行委員会

今回の世田谷展がこれまでの展覧会と異なる点は，学生が実行委員会メンバーに加わったことである。学生が実際に地域の活動の中に入って体験しつつ学ぶことは近年重要視されており，今回の世田谷展を進めるにあたり，学生の学びの場の一つにならないかと考えた。大学では，地域との連携及び大学の社会貢献活動の一環として，学生が実際に地域の活動に参加することで体験しつつ能動的に学ぶことが，Active Learning, Problem-Based Learning, Project-Based Learning として重要視されている。本学が世田谷区内に立地しており，展示に向けて，計画・実行し，事後のとりまとめと振り返りまでの学びは意義があると思われた。過去のゼミ学生は，陸前高田市のモビリア仮設住宅での祭りに他大学生と共に参加したり（2014 年 9 月），男女共同参画センター横浜南「フォーラム南太田」での展示の手伝いに加わったり（2016 年 2 月）しており，このような活動を通じて，学生が少しずつ成長していくことを実感してきた。2019 年度の学生たちは，阪神淡路大震災時には未だ生まれておらず，東日本大震災当時は中学生であった。中には家族で被災地を訪れたり，ボランティア活動に参加した者もいるが，多くは，被災地を訪れたことがない学生たちであった。このような学生たちの本プロジェクトへの参加は，震災及び防災・減災への関心の育成に役立つのではないかと考えるに至った。本プロジェクトに中心的に関わった 3 名（田中，磯部，木幡）は，「手芸や手仕事が好きである」という理由が活動参加の動機であった。

2018 年 6 月に学生にポスター制作をさせたところ，意義が摑めておらず作成が思うように進まない事態に陥った。そこで，2018 年 7 月 18 日に天野にゼミの授業での講義を依頼し，東日本大震災のフリー刺繍の作品の実物を見せていただきながら，〈「みんなのたからもの」ししゅう高田松原プロジェクト〉の持つ意味，経過，参加者について講義をしていただいた。この受講により，ゼミ生のプロジェクトへの理解は深まり，「仮ポスター」を制作し，広報活動を開始し，後援団体へのアプローチを行った。しかしながら，東日本大震災から 7 年が経過した被災地現場を，未だ訪問したことのない学生が事前講義のみで想像することは難しく，活動への動機を醸成させるためにも，なんとか現地を見せたかった。財政的に余裕のない学生たちが，自分たちの現地訪問のための費用を含めた必要な経費を，（株）Readyfor によるクラウドファンディングを用いて集めることを提案し，この初挑戦も学びの一つに位置づけた。

2019 年 1 月 4 日から 6 日には，陸前高田市，大船渡市を中心に実行委員会メンバー 8 名が被災地を訪問し，陸前高田市の戸羽太市長へのインタビューや，観光物産協会の語り部の方によるガイドツアーへの参加，大船渡津波伝承館，大船渡市川原地区災害復興住宅，気仙大工左官伝承館，仮設住宅モビリア，高齢者デイケアセンター訪問などの現地見学を行った（写真 14, 15, 16, 17）。学生 3 名は，初めて被災地を見て，現地の人の話を聞き，言葉を交わし，気仙大工左官伝承館に展示されている高田松原タペストリーの実物を見た。この経験は，後の活動への積極的な取り組みに大きく影響した。クラウドファ

写真 14　陸前高田復興まちづくり情報館（筆者撮影）

写真 15　観光物産協会語り部による話を聴く（筆者撮影）

写真 16　震災遺構としての気仙中学校と屋上の津波到達地点表示（筆者撮影）

写真 17　仮設住宅モビリアの高台から広田湾を望む（筆者撮影）

ンディング開始の準備，リターンの検討には苦戦もしたが，2019 年 2 月 15 日にクラウドファンディングを開始，3 月 20 日を終了日と設定した。このクラウドファンディングサイト訪問者 1,326 人のうち 107 人が支援してくださった。支援総額は，多くの協力者の支援のおかげで，当初の目標額 58 万円を大きく超え，87 万 3,000 円（達成率 150%）の寄付を得ることができた。

本プロジェクトを通じて，学生たちは「自ら経験していないことについて学び，考え，世代を超えて伝える」ことについて，自分事として受け止めることができたようである。そのために，現地を訪問し，自分たちの目で見ながら様々な人と話し，さらにそれらについてまとめるというプロセスを経て深い理解に繋げていったようである。また，新聞各紙やエフエム世田谷で取り上げられることを通して，メディアによる影響力を実感しながら，本プロジェクトの意義を実感している様子も見られた。彼女たちは，試行錯誤を重ねながら，トークサロンでの発表準備や報告書作成に多くの時間を費やした。そのことによって自分たちの経験とフリー刺繍の作品がもたらす意味が繋がり，自分たちが経験したことの意義を再確認したと思われる。

おわりに　―「生活文化」形成の視点からみる手仕事「刺繍」の持つ意義―

日本における手仕事としての刺繍（その中でのフリー刺繍）の歴史や経緯については，筆者の専門領域の範疇を超えるため本稿では踏み込まないが，天野寛子のフリー刺繍作品には，社会的課題への視座を含んでいるものが多い。それは生活経営学という学問領域で研究をしてきたことも影響していると思われる。その社会的視座が，天野の作品の一つである憲法前文・9 条・24 条を糸で緻密に記した刺繍作品を産み，国立女性教育会館 2019 年度女性アーカイブセンター所蔵展示「ベアテ・シロタ・ゴードン展～日本国憲法に男女平等の思いを込めて～」（2019 年 4 月 26 日から 11 月 4 日まで）の中で資料の一つとして展示されるなどの評価を受けている。

「刺繍」という手仕事は，アンペイドワークとしてであったり，趣味や芸術作品としてなど，それ自体は社会経済的に大きく取り上げられるものではない。しかしながら，今回のプロジェクトを通して，その行為を家庭内だけに留めず，発表・発信する場に位置づけ，社会化することで，大きな意味を持つことが示された。天野のフリー刺繍による作品はウラジオストクやニューヨークでも展示されているが，その文化・芸術的評価は高い。

天野のフリー刺繍作品及びタペストリー作品が表現している社会的課題は，非常に重く，辛く，深刻なものである。それが刺繍という，時間を要して一針一針縫う作業によって，制作者の心は落ち着き，次第に未来への希望が込められていくようである。作品展のアンケートにはそのことが書かれているものが数多く見られた。また，何人もの観覧者から，「辛い気持ちが作品を見ると明るくなる」と声をかけられたのもこの効果によるのではないだろうか。

本稿でとりあげたフリー刺繍という手仕事は，

「日常生活のなかで行われる，日常生活のなかから生まれる文化的営為に特化されたものを対象」(小泉 2014: iii) とした生活文化の取り上げ方になる。さらに，その生活文化の基部としての社会構造との関係性と生活及び社会の変容過程を確認することができる。

「生活文化」は，歴史学や民俗学等においては，生活のために使われたモノ，コト（祭りや行事），技術に関して使用されている。一方，家政学の生活経営学の領域では，「生活文化」は，衣食住の様式，生き方，生活の営みの仕方として，また，生活時間との関わり方も含め，人間の（男女の）生活様式の中で捉えられてきた。この中に，手芸・手仕事は，家事の一つとして位置付けられ，特に女性のアンペイドワークであった，東北地方は，他の地域よりも冬の期間が長いということにおいて，刺し子やこぎん，繕い物などの手仕事は多いと言えるかも知れない。またそれらは「手慰み」でもあった。これらの手芸・手仕事は，家事労働であったと同時に生活文化として形成されてきた。現代では，多くの場合，趣味としての手仕事になっているという変化も見られる。本稿で取り上げた「ししゅう高田松原プロジェクト」は，手芸・針仕事を取り入れ，多くの者がイメージしやすい美しい松原と物語を持っている風景を思い出し，想像しながら「喪失してしまった故郷の風景」をフリー刺繍によって取り戻し，そこで文化を共有する点に意味がある。制作者の多くは女性であり，女性の文化として繋がっている側面は強い。しかしながら，制作者の中には数名の男性もいる。女性の文化として捉えられがちな手芸・手仕事であるが，作品から得られた共感にジェンダー差は感じられない。

本世田谷展開催によって，被災者同士，被災者と支援者，支援者同士，作品と作品，それぞれの想いが，想像以上に繋がっていくことを実感した。これはまさに「生活文化」の共有といえるだろう。

注

1 「バージの会」は，世田谷区船橋・経堂・千歳台周辺でゆったりと子どもや暮らしをみつめるネットワークとして活動している。Bargeは大きな船から人や荷物を運ぶ船，はしけの意で，船と橋から，船橋周辺でのつながり・絆をイメージして命名された（会発行チラシから引用）。

2 「特定非営利法人夢のはな奏であい」は，広く一般市民に対して，音楽活動及びその他の活動を通じて，高齢者の生きがい支援，子どもの健全育成，音楽の普及を支援する事業を行い，だれもが生涯を通じて生きがいや楽しみ，喜びをもって暮らしていける社会の実現に寄与することを目的としている（同会 Web Site: http://npo-yumekana-music.org/ 2020年1月8日最終アクセス）。

3 東北地方では，人が集まって，お茶を飲みながらおしゃべりをすることに，「お茶っこ」という方言が用いられており，人々の繋がりの文化が形成されている。被災地でも，復興・復旧支援やコミュニティづくり，コミュニケーションの場として機能している。

[引用・参考文献]

天野寛子（2010）『繋ぐ―天野寛子フリー刺繍画集』ドメス出版.

天野寛子（2013）『繋ぐ②―天野寛子フリー刺繍画集』ドメス出版.

粕谷美砂子（2016）「自営業・農業における女性労働への視座」『女性労働研究』第60号，86-107　すいれん舎.

小泉和子編（2014）『新　体系日本史14.　生活文化史』山川出版社.

斎藤悦子・伊藤セツ（1996）「企業文化と生活文化の関連一家政学における生活文化論の意義」『家政学会誌』Vol. 47, No. 4, 303-312.

定兼学（1999）『近世の生活文化史』清文堂出版.

（公財）東京財団（2012）『被災地の聞き書き101　暮らしを語り，思いをつなぐ。』（公財）東京財団.

レイモンド・ウィリアムズ著，川端康雄編訳，大貫隆史・河野慎太郎・近藤康裕・田中裕介訳（2013）『共通文化にむけて　文化研究I』みすず書房.

謝辞：（公財）せたがや文化財団世田谷美術館の共催をいただき，橋本善八副館長には多大なるご協力を賜りました。また，世田谷区，陸前高田市，それぞれの教育委員会，（福）世田谷区社会福祉協議会，（福）世田谷ボランティア協会，昭和女子大学，本学光葉同窓会にはご後援いただきました。実行委員会メンバー（バージの会，NPO法人夢のはな奏であい，天野寛子読書会，粕谷ゼミ学生），フォトグラファー渋谷純一氏，実行委員副代表松園伸子氏，中西朝子氏，元普及職員藤原りつ氏他，ご協力・ご尽力いただきましたすべての皆様に心から御礼申し上げます。

（かすや　みさこ　　現代教養学科）